

鉄道尾小屋線 最後の日

安達 茂治

いよいよ待望久しかった新幹線の小松駅開業が目前に迫ってきた。この開業を機に駅前周辺も市内も急ピッチで様変わりして行くことだろう。淋しさと期待感が交錯するが、この世に生きているかぎりその波に乗って行くしか方法はないだろう。

この発展の出発点となったのは、今から四十六年前に廃業した鉄道尾小屋線最後の日ではなかったか。その最後の日を見届けた一人として感慨を込めて当時を回顧してみた。

昭和五十二年（一九七七）三月十九日の

夜が次第に更けて行つた。時刻は二十二時三十分。現在の小松大学施設の東側、新幹線の高架下辺りに位置していた尾小屋鉄道「新小松駅」の構内には、間もなく入ってくる最終電車を迎えようと、尾鉄の関係者や報道陣、全国から駆せ参じた鉄道マニア、名残りを惜しむ地元の人たちなど数千人がひしめき合っていた。構内の一角には貨物を曳いて走っていたC—1五五型という小型の蒸気機関車も置かれていた。その上にもカメラを抱えたマニヤたちがこぼれ落ちるほどに張り付いて、最終電車が入ってくるのを今や遅しと待ち構えていた。

やがて警笛の音が聞えて、ディーゼル機関車に引かれた四両の客車が入ってきた。資材などを運ぶ以外では珍しい長連結だ。時刻は二十二時三十八分だった。どこからともなく拍手が湧き起り、それが観衆全員に拡がっていった。客車からは尾小屋鉄道社長や小松市長、小松商工会議所会頭（いずれも当時）などを混じえた溢れるばかりの満員の乗客が一斉にホームに降り立ち、さほど広くもないホームは大混雑の状態になった。その雑踏をかき分けながら若い男性社員が前に進み出て、降りて来た運転手

に花束を贈った。カメラのフラッシュが一斉に光って、運転手は鉄道マニヤからサイン攻めに合っていた。運転手には二十数年間、斜陽の鉄道尾小屋線を必死に守り通してきた栄光の姿が、この一瞬に凝縮されているかのようだった。

時間が二十二時五十分を少し廻った頃、構内の一角に設けられたテントの中で、会社の解散式典と記念パーティーが始まった。旧運輸省名古屋陸運局長や小松市長、小松商工会議所会頭、会社幹部の私服組、制服組など総勢約二〇〇名、その他報道関係者などで狭いテントの中は身動きも取れない状態だった。

尾小屋鉄道社長に続いてあいさつに立った竹内伊知小松市長（当時）は、「私が尾鉄の電車で初めて乗ったのは小学校二年の遠足の時でした。車掌さんから『電車が途中で動かんごとなったら、皆降りて押さんぞ』と言われました。その時この電車はほんとうに自分の足だと思いました。地域の足として親しまれてきた尾鉄の電車が消え去ることは、時代の流れとは言えまことに残念でなりません」と語った。

この鉄道に従事してきた人たちはいずれ

もかなりの高齢であったが、今日、この尾小屋線最後の日に残る情熱のすべてを注ぎ込んでしまうかのごとく、はつらつと目を輝かせていた。最後の電車を運転してきた運転手が報道陣のインタビューで語っていた。

「国道八号線（現在の国道三〇五号線日の出町交差点）で大型トラックと衝突したことがあった。電車は横倒しになったが軽いケガで助かった。危い思いも数えられんほどしてきたが運が良かった。鉄道の運転手は鉄道があつてこそエリート……」と淋しげだった。作業服姿の年配の社員がテールのオードブルに手を伸ばした。やたらとシワばかりが目立つ手は永年保線の作業に打ち込んだきた手であろう。そんな下積みの人々の不断的努力によって尾鉄は支えられてきたのである。

突然、会場の一角からバンザイの声が上がった。それに合わせて関係者だけでなく、報道陣も飛び入り参加のマニヤたち、テントの外に居た人までが、精いっぱい声を張り上げて唱和した。その声が尽きると最後を締める「蛍の光」のメロディーが流れ始めた。

その曲に乗せて女声のアナウンスが「大

正八年十一月二十六日、営業を開始して以来五十八年間、永らくのご愛顧をいただきました鉄道尾小屋線は本日をもって営業を終わらせていただきます……」と流れた。なぜか無性に悲しみをかき立てるような声となつて響き渡った。テント内のあちこちで目頭を押さえる白いハンカチが上下していた。尾小屋鉾山の盛衰と共に歩み続けた鉄道尾小屋線最後の日はあと残すところ三十分で終わろうとしていた。

時の流れが肌にヒシヒシと迫ってくるような早春の深夜であつた。

〈注〉鉄道尾小屋線は新小松の駅を発つてから現国道三〇五号線の日の出町交差点で国道を横断。その間遮断機のバーを下げて車を遮断したが衝突の事故も多かった。

